

目次

酔っ払いの前口上——夜中にひとり昭和四十年代を振り返る——

6

第一夜 酒場の原風景

——モツ焼きの煙——

21

第二夜 お馴染みさんへのはるかな道

——通い始め、注文の品とタイミングなど——

35

第三夜 酒場あれこれ

——角打ち、居酒屋、大衆酒場で飲み修業——

51

第四夜 ひとり酒のススめ

——最寄り駅、隣駅、そして旅先の酒場へ

67

第五夜 飲兵衛には旅をさせよ

——旅の酒のうまさ、酒の旅の愉楽

83

第六夜 飲兵衛とカネの話

——計算するだけ無駄ってことよ

99

第七夜 コロナ禍の後で

——今はなき新宿の名店を偲ぶ

115

第八夜 酒の道にお作法はありや

——おとなしくなった酔っ払いたちへ

131

第九夜 酒飲みの健康について

——痛風メンタル説を撤回す

149

第十夜 あの店この店に佳肴あり

——豆腐一丁あればいいとはいえ

167

第十一夜 さよならだけが人生だ

——別れはいつも突然やってくる

185

第十二夜 酒の名人たち

——酒は飲む人だけのものならず

203

後口上——息をするように酒を飲む

221

酔っ払いの前口上

——夜中にひとり昭和四十年代を振り返る

私は、昭和三十八（一九六三）年、東京・三鷹^{みたか}に生まれ、二〇二〇（令和二）年暮れの現在、五十七歳になりますが、思い返せば、ずいぶんと酒を飲んできました。

仕事もしたし、遊びもしたし、家庭も持った。私なりに楽しいこと苦しいこと、いろいろ経験してまいりました。気弱な私が勤めを辞め、ひとりで生きること挑んでみたりもした。

振り返って、すべて成り行きであつたと思うけれども、一方で、やたらと忙しい半生だったとも思います。

ですから、のんびんだらりと酒を飲むばかりだったというわけではないのです。そう、そのはずだ。しかし一方で、ココロを鎮めて来し方を振り返るならば、やはり、ああ、実

によく飲んだものと、感慨深い。

何を言っているのやらハナから定かではありません。寸暇を惜しんで酒を飲んだ？ そんなわけはない。ただ、ずいぶんと飲んだ。それしか言いようがないですな。

そもそも、酒を飲み始めたのはいつだったか。

多くの人は、正月のお屠蘇とそを舐なめるとか戯れに父親の酒を舐めるとか、そんな経験をお持ちではないかと思えます。まあ、私の場合も似たようなものです。正月に祖母ばあさんの家に親戚が集まるのですが、そのとき叔父のひとりが私をのせた。

お前も男なら、一杯やってみろ……。

アタシはね、と急に江戸っ子を気取る必要もないのですが、男なら、なんて言われて黙っていられる小学五年生ではなかった。

コップのビールをぐいっあおと呷あおった。それが最初の酒だ。

すぐさま、喉のあたりがカッと熱くなって、やややと一瞬狼狽うろたえるわけですけども、オトナたちも悪いんだ。

「いよッ、いい飲みっぷりじゃねえか」

みたいなことを言うものだから、バカは余計に調子にのって、また、ぐいっとやる。たちまち顔は真っ赤になる。セーターを脱ぎ、シャツの袖をまくって、ガキなりに^{かつこ}恰好をつけてみたのですが、幸いなことに、酔いのほうは、それくらいですみました。

そして、わかったことがある。

ビールは舐めると苦いが、ぐいっと飲めばたしかにうまい。

幼くしてたいした発見をしたのですが、身体が^{からだ}火照ることさえどこか晴れやかで気分がいいものだと感じていたのも事実。つまり、酒飲みの素質はあったのです。

とはいえ、そのときから、飲みっぱなしだったというわけではない。若い頃を振り返れば何度も^{いたずら}悪戯はしましたが、本格的な酒飲みになるのは、まだまだ先のことです。

だから、私が「昔の酒」として思い出す光景の、そのもつとも古いところは、私自身が飲むようになるはるか前の話。私の親たちが盛んに飲んでいた頃の、記憶の中の光景ということになります。

では、どんな時代だったのでしょうか。

ときは昭和四十年代ですよ。場所はというと、東京西郊、三鷹市内の公団住宅です。

私が小学校へ上がるのが昭和四十五（一九七〇）年の四月です。その年は、昭和七（一九三二）年生まれ之父が三十八になる年ということになる。ということは五歳年下の母はまだ三十三歳だ。我が家はご近所に比べると家電製品についてオクテであつたらしく、昭和四十年代になってようやくカラーテレビが公団住宅テラスハウスの一階四畳半の居間に導入されたと記憶している。

四本足のテレビの横にはサイドボードと呼ばれる家具があり、前面のすりガラスを開けると「サントリーオールド」のボトルがあつた。

サイドボードの上には電話と、ステレオ。このステレオというのが、カパツと蓋を開けると小さなターンテーブルがあつて、いわゆるEP盤ならそこにスポツとおさまってかけられるわけですが、LP盤となると、ステレオの前後にレコードがはみ出す。けれども実に微妙かつ繊細にLP盤レコードは回転するのであつて、その端っこに針を下ろすのは厳肅なる儀式であつて、父がそつと針を置く一瞬を、固唾をのんで見守るみたいな感じがあつた。

我が家はなかなか物持ちのいい家でしたから、このシブいステレオは私が中学二年生の冬にパイオニアの正式なコンポ——妙な言い方ですが、今もそんな感覚が残っている——に後を譲るまで、これまたずっと現役だったサイドボードの上に鎮座していた。

さて、そのサイドボードの中に、「サントリーオールド」、通称ダルマのボトルがいつもあった。しかし、これは実は「サントリーオールド」ではなかった。

なんなんだ？

外側は「オールド」だが、中は「レッド」なのである。つまり、「サントリーレッド」を「オールド」のボトルに移し替えて、サイドボードの中央あたり、グラスやソーサー付きのコーヒーカップなどを待らせる形で鎮座させていたのです。

我が家だけのこともしれぬ。他所ではそういうセコな真似はしていなかったのかもしれない。しかし、私は覚えている。父が「レッド」のボトルを傾けて「オールド」のボトルに中身を移し替えていた日曜日の夕方を、鮮明に覚えているのです。

と、ここで、気がつくことがある。私がこれを書いているのが、二〇二〇年十二月の某夜です。そして、現在の我が家にも茶^{ちや}簞^{だん}笥^すがあり、すりガラスの向こうには「オールド」

ならぬ「サントリーローヤル」のボトルがほんやり見えている。そして、実はこれが、「ローヤル」ではない。中身は「角」だ。

このボトルは、私の長女が初任給で彼女の母方の祖父——私にとっての義父——にプレゼントした「サントリーローヤル」である。ウイスキー好きのおじいちゃんに買ってあげると何がいいかと訊かれて、「響」や「山崎」といっては就職直後の薄給の娘には酷だろうし、かといって、孫が奮発してくれてなんとも嬉しいと思ってもらえる銘柄として、私が推薦したのが「ローヤル」だったのだ。

義父はことのほか喜んだ。その証拠に、ほとんど飲まずに飾っていた。義父は「ローヤル」を飾ったままにして、「オールドバー」のボトルに詰めた「角」を日常の酒として飲んでいた。実父より義父のほうが先輩だが、ふたりとも昭和ヒト桁世代。戦後の昭和二十年代に学生時代を過ごし、三十年代に「トリス」のハイボールをがぶ飲みしたであろう世代である。彼らはともにウイスキーの詰め替えをしていた。

さきほど私は実父の詰め替えについてセコいと書いたけれど、本意ではない。自宅でゆっくりウイスキーを飲むときに、好きなボトルから注いで飲みたい。その気持ちはわかる。

というのは私自身のウイスキーも、「トリス」に始まり、長く「ホワイト」を飲み、日常的に「角瓶」を買い足すようになるまでに、ずいぶんと時間がかかったからだ。

義父は、「ローヤル」をまだいくらも飲まないまま他界した。そして、「ローヤル」のボトルを私が引きとった。形見のようにして、一本の、飲みかけのウイスキーをいただいた。それを、実は一昨年（二〇一八年）になってから、飲んでみた。義父の命日だったか。

さまざまな形でいつも私を激励することを忘れなかった義父のウイスキーは、飲み始めるとスルスルと我が喉を通り抜け、気がつけば、こいつは飲みすぎでい！と思わず叫ぶほどの減り方を示した。

そこで私は、残りの「ローヤル」を飲み干して「オールド」を詰め、どれどれ、久しぶりに飲む「オールド」はどんな味わいかいなど舐めるつもりが、おいおい、飲みすぎだぜ、という具合になって、こうなったら仕方がないと、翌々日くらいには空けてしまってから、「角」を詰め直したのである。

だから、今、私の目の前にある茶箆筒のすりガラスの向こうにぼんやり見えているのは、「ローヤル」のようで「ローヤル」でなく、「角」のようでいて「ローヤル」の顔をしてい

るという、不思議な一本なのである。

夜中に、そのボトルを眺めていて思うことがある。昔の男たちは実によく飲んだ。子供の目から見ているからそう見えるという面もあるだろうけれど、それにしてもよく飲んだなあ、と思う。

私の住んだ公団住宅には、父母の同世代の家庭が多かった。子供たちもたくさんいて交流は密であり、どの子がどこの家の子で、何年生で兄弟は誰で、ということが、他所の家庭にも知れ渡っていた。

団地中央の商店街には連日、主婦たちが買い物に集まり、商店主たちとさまざまに会話をしながら、毎日の献立を考えたり、情報を交換したり、ときにどこそこの奥さんはまた初物の果物を買っていったとか、あそこは今夜はすき焼きだとか、あれこれ小うるさい詮索もし合っただろう。

父たちはどうだったかというと、朝七時くらいには大挙して団地を出て、三鷹か吉祥寺駅まで二十分ほどバスに揺られ、そこから都心へ向かう。月から金までは、残業だのお付

き合いだのいろいろあつて帰りはけつして早くない。我が家に限つて言えば平日に父親が晩飯の食卓にいたことはない。近所の家で飯をご馳走ちそうになることもあつたが、父親がいるのは商店や木工所など自営業の家であり、一般の勤め人家庭の夕餉ゆうげにその家の父親がいた覚えがない。

あの頃の父親たちは土曜日も出勤していた。そして日曜日。唯一の休日に、団地の子供たちを集めて野球を教えたり、お神輿みこし、盆踊り、餅つき大会などなどの団地の行事に駆り出されたりして、打ち合わせで飲み、打ち上げで飲んだ。そんな感じだったろうと思ひ返されます。

我が家は、日曜の夜の麻雀マージャン会場になることが多かった。昼間は少年野球の指導。夕方いったん帰宅してひと風呂浴びてから、オヤジたちはまた出直してくる。日本酒だのウイスキーだの、ちよつとしたつまみなど持ち寄つて、四人で麻雀一卓を囲み、余りの二名は脇で碁や将棋に興じる。そして、飲むのだ。母はひたすら酒肴しゅこをつくり、次々に提供する。驚くべきは、このオヤジ六人による麻雀付きの酒盛りが、公団住宅テラスハウス一階の四畳半で行われていたということです。

狭いよお。オヤジ六人。それぞれにつまみの小皿とグラスや徳利。日本酒好きの横には一升瓶がでんと置かれ、私は洋酒党なんて気取ったオヤジの横にはご丁寧にアイスペールと水差しまで置かれ、ポンだ、チーだ、あ、奥さん、氷ください、このチーズ揚げ、うまいなあ、奥さんは本当に料理上手でいいよ、ウチのヤツにも教えてやってくださいよ、おーっと、それは通しません、ローン！　なんて叫んでる。

うるさい、うるさい。私と兄は早々にカレーライスとかラーメンとか食べさせられるや、邪魔だからと二階へ上げられてしまう。子供は八時就寝という家でしたから、ほどなく布団に入るけれど、階下はどんちゃん騒ぎに近い。うるさい、うるさい。

けれど、そこはお調子者のワタクシ、へへ、賑^{にぎ}やかでいいよ、くらいに思っていた。可^か哀^わそうだったのは、お隣さんだ。我が家の隣家は、団地の長屋ですから壁一枚の向こう側ということになるわけですが、先生のご家庭だった。先生といっても大学の先生。たいへん物静かな先生で、後年、あのほとんど口をきかないように見えた先生が微生物学の教授であつたことを知るのですが、本来ならば翌週の講義の準備などしなければならぬ日曜の晩に、夜更けまで騒ぐ酔っ払いが隣家に集結していたのは、かなりのストレスになって

いたことと推察される。

今ならば警察に電話をかけるご近所さんがいてなんら不思議ではない。

人の迷惑になることはするな――。

それは昔も今も同じだが、今ならば、連絡を受けた警察が、「ご近所から苦情が出ていますから、みなさんそろそろ解散してはいかがでしょうか」と、諭しに来る。すぐに来るのではないだろうか。

しかし、あの頃は違ったのだ。温厚な人格者がお隣さんだったという幸運はあると思うけれども、それ以前に、ちよつとやさつとこのことに目くじら立てる時代じゃなかった。

そんな時代の風潮に甘えたのか、オヤジたちはよく飲んだ。翌朝からの一週間を考えればとつとと帰って寝るに限ると思うけれども、当時のオヤジたちは、そのいくばくかの睡眠より、楽しく飲み、麻雀に興じるほうを選んだ。歳としの頃なら三十代後半から四十代に差し掛かるオヤジたちは、今のその世代よりはるかに生き生きとして、元気だったのではないだろうか。

最近、酒場で飲んでいて、居場所がないような、申し訳ないような、ちょっとした孤独を感じることがあります。五十を過ぎてから、たびたびそれに気づくようになった。そんな気持ちが起こる原因のひとつが、昔のオヤジたちはもつとあっけらかんと遊んでいたよな、という思いがよぎるからではないか。そんな気がしているのです。

今、酒場でひとり、周りの人たちの会話などを耳にしながら酒を飲むとき、ああ、ずいぶんきれいごとだなあ、と思うことがしばしばなのです。

法螺ほらも与太もない。ケンカも、口論もない。熱くならない。みんな一見冷静である。あなたの意見もわかるけど、という枕詞まくらことばなしに自分の考えはひと言も口にしない。安全対策。叩たたかれる事態への備え。防御壁を張りめぐらせて、当たり障りのない話をする。それだけならまだしも、一座に若い女性のひとりでもいれば、たちまちにやけて、見解も、希望も、批判も、揶揄やゆも何もなくなつて、ふにゃふにゃしている。そういうヤツらが多くなつたんじゃないか。一見してきれいだが、その実は、中身のなにひとつない、会話、人間関係。ハタと気づくのは、そういうヤツらの中に、ほかならぬ私も含まれているかもしれないということだ。

先日、ある馴染みのバーで、同世代のバーテンダーを相手に飲んだ。昨今のお客さんは、みなさん行儀がいいですよ、とのことである。便所の掃除が昔に比べて格段に手軽にすむようになったとも言った。

スツールから落ちるヤツ、口論するヤツ、手持ちの金が足りなくなるヤツ、店の前ではたと倒れるヤツ、そういう人がいなくなった。

酒は飲んでも飲まれるな。それを地でいく人が増えたということか。私なんぞは、酒は飲まれてナンボと思ってきたクチだから、頭では理解できても面と向かって言われたらカチンときてしまう。しゃらくせえ、と思ってしてしまう。

だから、今いち、波長が合わないのか。それが、酒場でふと感じる孤独感なのか。そんなこともそのバーテンダーに話したのだけれど、彼はおもしろいことを言ったのだった。

「私ら五十代は、今の若いお客さんからしたら、長老ですから」

これには参った。尖るな、丸くなれ、万事穏やかに受け流し、酒もほどほどに……。長老とはそういう人であり、知恵者であるべき。そういうイメージがある。

ああ、しかし、私は、年齢的には長老なれど、永久に本当の長老にはなれないタイプ。

はつきりとした自覚がある。だから、今、なんのきっかけか定かでないが、昭和四十年代を懐かしみ、自身の酒の来し方をそれに重ねて深夜の酒のつまみにしている。

人はなぜ酒を飲むのか。私はどのように酒を飲んできたのか。酒とは、いったい、何を与えるものなのか、あるいは奪うものなのか。

自身の酒飲みとしての半生を回顧しつつ、酒飲みのありようと酒場の見聞を、毎夜少しずつ拾い集めてみたいと思います。